

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年4月29日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2011～2012

課題番号：23820052

研究課題名（和文） 人間・動物関係論の再構築－70年代以降の倫理的動物論と哲学的動物論の影響関係

研究課題名（英文） Reconstruction of Human-animal relationships: Mutual influence between animal ethics and animal philosophy from the 1970s

研究代表者

浜野 喬士 (HAMANO TAKASHI)

早稲田大学・文学学術院・助教

研究者番号：20608434

研究成果の概要（和文）：

論文「肉食忌避・ベジタリアニズム・動物：倫理的動物論と人間・動物関係論」（『叢書アレテシア』第14巻、2012年）では、現代ベジタリアニズムが、(1)動物倫理学的背景 (2)環境倫理学的背景、(3)栄養学的背景を持つことを明らかにした。その上で、西洋思想史における肉食忌避の系譜が、ヘシオドス、プルタルコス、ポルピュリオス、ルソー、シェリーらにまで遡りうることを示した。

論文「なぜ捕鯨問題は解決できないのか」（『日本の論点2012』、2011年）では、捕鯨問題を、ドイツおよびスイス憲法における動物の位置づけの変化を念頭に、環境問題、「動物の権利」論、応用倫理学から多面的に分析した。従来、捕鯨論において十全に扱われてきたとは言い難かった、問題の思想的背景について、哲学的小および倫理的方面から、1970年代以降の動向に焦点を当てつつ、論点を提示した。この作業を通じ、「人間・動物関係論」という総合的視点から、「動物の権利」や「人間中心主義批判」といったこれまで一般に用いられてきた枠組みを超えて、捕鯨問題を考察するための概念枠組みを示した。

研究成果の概要（英文）：

The purpose of the paper "Flesh-avoidance, Vegetarianism and Animals: Ethical Animal Theory and Human-animal Relationships," in Alethia Library, Volume 14 (Published by Ochanomizu Shobo, 2012) was to show that modern vegetarianism has three theoretical backgrounds: animal ethics, environmental ethics and science of nutrition, and that vegetarian tradition can be tracked back as far as the works of Hesiod, Plutarch, Porphyry, Rousseau and Shelley.

The paper "Why the Whaling Issue Cannot be Solved?" in Japan's Debates for 2012 (Published by Bungei Shunju, 2011) put the whaling issue in the philosophical contexts. Focusing on the debates since 1970s, I suggested this problem should be treated more closely with respect to "human-animal relationships" as well as "animal rights" and "criticism of anthropocentrism".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2011年度	700,000	210,000	910,000
2012年度	200,000	60,000	260,000
総計	900,000	270,000	1,170,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・倫理学

キーワード：哲学・倫理学・思想史・動物倫理学・環境倫理学・生命倫理学・人間動物関係論

1. 研究開始当初の背景

| 近年の哲学・倫理学研究において、次第に

注目を集めているのが、「人間・動物関係論 (Human-Animal-Relationship: HAR)」と呼ばれる新しい学問領域である。「人間・動物関係論」という語の定義はまだ確定していないが、一般的には、理系領域から派生した「動物研究(Animal Studies: AS)」や、倫理学領域で展開されてきた「動物の権利論」「動物解放論」、そして哲学領域におけるポストヒューマニズム論を包摂する、領域横断的研究を指すものである。具体的には哲学、倫理学、宗教学、文化人類学、生物学、社会学等の学問領域を含む。例えば近年登場したカルフ／フィッツジェラルドによる「人間・動物関係論」的アンソロジー、『アニマルズ・リーダー』(2007年)などは、動物を思想的に論じるにあたって、従来主流であった、倫理学的なアプローチの文献に留まらず、社会学的、宗教学的、文化人類学的テキストを数多く採用している。

このように「人間・動物関係論」が台頭してきた背景としては、1970年代以降、倫理学的動物論が、そして1980年代以降、哲学的動物論がそれぞれ別個に大きく発展してきたことが挙げられる。倫理学的動物論とは、1970年代のピーター・シンガー、1980年代のトム・リーガンらにより形成されてきた、狭義の倫理学における動物論である。他方、哲学的動物論とは、1980年代以降、ジャック・デリダ『精神について』(1987年)におけるハイデガー動物論解釈を皮切りに、エリザベート・ド・フォントネの『動物たちの沈黙』(1998年)や、1990年代～2000年代のデリダの講義を中心に発展してきた、狭義の哲学における動物論である。

しかし、主に英米を中心に、応用倫理学的方向から研究されてきた倫理学的動物論と、フランスを中心に、哲学・存在論の方向から研究されてきた哲学的動物論の間には、議論の断絶が見られている。そしてこの断絶は、昨今の「人間・動物関係論」でも、必ずしも解消されていないように映る。例えば、2000年代における「人間・動物関係論」の代表的著作、マシュー・カラルコの『動物誌学』(2008年)では、基本的に哲学的動物論のみが取り扱われ、倫理学的動物論への視点は欠けている。一方、ウルシュラ・ヴォルフにより編集された動物論アンソロジー(2008年)には、倫理学的動物論のみが収録され、哲学的動物論はほぼ完全に排除されている。倫理学的動物論と哲学的動物論の相互的影響関係は、詳細には問題化されない状態が続いている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、第一に、従来分離して研

究されてきた、倫理学的動物論(英米の応用倫理学中心)と哲学的動物論(大陸哲学中心)を、総合的視点から考察することで、1970年代以降の両者の相互影響関係を明らかにし、「人間・動物関係論」と呼ばれる新しい学問領域の位置づけを明確化すること、また第二に、「人間・動物関係論」という総合的視点から、「動物の権利」や「人間中心主義批判」といったこれまで一般に用いられてきた枠組みを超えて、動物を考察するための包括的理論を構築することである。

(1) 1970年代以降における倫理学的動物論と哲学的動物論の発展史を構築することが本研究の直接的な目的である。本研究が直接対象とする時代は、1970年代から現在までである。倫理学的動物論については、1971年のロスリンド／スタンレー・ゴドヴィッチおよびジョン・ハリスによる『動物・人間・道徳』刊行および、1975年のピーター・シンガーによる『動物の解放』をもってその現代的起源とする。他方、哲学的動物論については、マシュー・カラルコ／ピーター・アタートン『動物哲学』(2004年)、および、マシュー・カラルコ『動物誌学』(2008年)らの研究に従って、マルティン・ハイデガー『形而上学の根本諸概念』

(1929/30年冬学期)が動物論として「発見」された、1980年代以降をもってその現代的起源とする(したがってハイデガーについては80年代以降の解釈を中心に検討する)。これらに対し、19世紀ヴィクトリア朝期のイギリスにおける動物愛護運動、および同時代のベンサムらの動物論については、拙著『エコ・テロリズム』第3章で詳述したので、本研究の考察対象からは除外する。また本研究は、「人間・動物関係論」に含まれる学問領域のうち、宗教学、文化人類学、社会学等関連文献については間接的にのみ参照し、従来の区分で言うところの哲学・倫理学文献を主として考察する。本研究の検討対象とする地域は、イギリス、アメリカ、フランス、ドイツ、イタリアを中心とした、いわゆる西洋に限定される。「人間・動物関係論」の重要なテーマの一つである「動物供犠」を、ヨーロッパ、南アジア、東アジア等々と地域ごとに比較考察すること、あるいは、聖なる動物と忌避される動物の区分を、地域ごとに比較考察することなどは、並行して考察するにはテーマが大きすぎるため、本研究の対象外とする。

(2) 倫理学的動物論と哲学的動物論を架橋する「人間・動物関係論(HAR)」の理念を提示することが本研究の間接的な目的である。1990年代以降、特に2000年代以降に増える、倫理学的動物論と哲学的動物論

の、双方の流れを意識した横断的テキストを収集、集中的に検討し、その射程と限界を明らかにすることで、「人間・動物関係論」の理念を明確化する。「人間・動物関係論」の理念としては、あくまで記述的な方法論を採用する。近年、積極的な動物解放論の立場から台頭してきた、いわゆる「批判的動物論 (Critical Animal Studies: CAS)」において提唱されているような、規範的な方法論は採用しない。

(3) 本研究の学術的な特色・独創的な点及び意義等については以下である。

①本研究は、主に英語圏を中心に展開されてきた、功利主義、動物の権利論、契約主義、共感倫理学、徳倫理学を中心とする倫理的動物論と、ドイツ、フランスを中心とする、ハイデガー、デリダらの哲学的動物論を、相互影響関係に注目して考察する横断的研究である。②本研究は、従来分断されて研究されてきた倫理的動物論と哲学的動物論の、相互影響関係を明らかにするという点で先駆的研究である。③本研究は諸文献を、概念・理念の変遷という点から検討する思想史的研究である。④独創的な点としては、従来の倫理的動物論において重視されてこなかった哲学的、形而上学的含意に、思想史的な観点から着目し、「動物の権利」や「人間中心主義批判」といった概念の歴史的背景を明らかにしようとしていることである。また従来の哲学的動物論では重視されてこなかった、倫理的動物論の側からの影響関係を明らかにしようとしている。⑤本研究の意義は以下である。第一に、従来、没交渉と見られてきた、倫理的動物論と哲学的動物論の相互的影響関係が明らかになる点、第二に、思想的に動物を広範な視点から論じるための「人間・動物関係論」が整備されるという点である。

3. 研究の方法

本研究の研究計画・方法について以下に説明する。

(1) 倫理的動物論の発展史について、文献、論文の収集・分類・整理を行なう。図書館に収蔵されている資料の他、英語圏の「人間・動物関係論」研究機関アーカイブ、電子資料についても調査を行なう。これらの作業を通じ倫理的動物論のアウトラインを作成する。

(2) 哲学的動物論の発展史について、文献、論文の収集・分類・整理を行なう。図書館収蔵図書資料の他、ドイツ語圏・フランス語圏の「人間・動物関係論」研究機関アーカイブ、電子資料についても調査を行なう。これらを

通じ哲学的動物論のアウトラインを作成する。

(3) 上記(1)(2)で作成した倫理的動物論、哲学的動物論のアウトラインを元に、両者の影響関係を考察し、新たな「人間・動物関係論」の理念を提示する。成果について論文を執筆する。

4. 研究成果

論文「肉食忌避・ベジタリアニズム・動物：倫理的動物論と人間・動物関係論」では、現代ベジタリアニズムが、(1) 動物倫理的背景 (2) 環境倫理的背景、(3) 栄養学的背景を持つことを明らかにした上で、西洋思想史における肉食忌避の系譜を、ヘシオドス、プルタルコス、ボルピュリオス、ルソー、シェリー、シンガー、リーガンらを中心に検討した。本論文を通じて、ベジタリアニズムという個別的問題に定位しつつ、従来分離して研究されてきた、倫理的動物論 (英米の応用倫理学中心) と哲学的動物論 (大陸哲学中心) を、総合的視点から考察し、両者の相互影響関係を明らかにした。また同作業を通じて、「人間・動物関係論」と呼ばれる新しい学問領域の位置づけを明確化した。また本論文の執筆過程で、倫理的動物論および哲学的動物論の発展史に関する主要一次・二次文献を収集することができた。

論文「なぜ捕鯨問題は解決できないのか」(『日本の論点 2012』、2011年) では、捕鯨問題を、ドイツおよびスイス憲法における動物の位置づけの変化を念頭に、環境問題、「動物の権利」論、応用倫理学から多面的に分析した。従来、捕鯨論において十全に扱われてきたとは言い難かった、問題の思想的背景について、哲学的小および倫理的方面から、1970年代以降の動向に焦点を当てつつ、論点を提示した。この作業を通じ、「人間・動物関係論」という総合的視点から、「動物の権利」や「人間中心主義批判」といったこれまで一般に用いられてきた枠組みを超えて、捕鯨問題を考察するための概念枠組みを示した。

本研究は、上記両論文に表れているように、動物、肉食忌避、ベジタリアニズム、捕鯨といった問題を観念史的なアプローチから分析し、「人間は動物に対してどのような態度をとるべきか」「いかなる条件を満たせばある種の動物は道徳的考慮の対象となりうるか」「肉食は許されるべきか否か」といった規範的問いに代えて、「<人間が動物に対してどのような態度をとるべきか>、といった形で問題を<倫理学>化してしまうのはなぜか」「人間・動物関係の倫理化の歴史的・思想的起源とは何か」「ある種の動物を道徳的考慮の対象として、他の対象から<線引き>しうるための思想的前提とは何か」「肉食

という、文字通り肉食動物にとっては自明の営みが、人間にのみ倫理的問題として現象するその歴史的条件とは何か」という問いを提示した。こうした観念史的アプローチにより、本研究は「人間・動物関係論」の位置づけを再定義し、倫理的動物論と哲学的動物論を総合的な観点から考察する視座を提示した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

①浜野喬士、肉食忌避・ベジタリアニズム・動物：倫理的動物論と人間・動物関係論、叢書アレタイア、査読無、14巻、2012、227-263

②浜野喬士、なぜ捕鯨問題は解決できないのか、日本の論点 2012、査読無、2011、484-487

[学会発表] (計0件)

[図書] (計0件)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

浜野 喬士 (TAKASHI HAMANO)

早稲田大学文化構想学部現代人間論系・助教
研究者番号：20608434

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし